県内産業の展望
（その 19）
═恐慌下の県内生産活動═

県統計課　横須賀　弘

前号で述べたとおり大戦後の慢性的不況は，昭和２年の金融恐慌さらに昭和４年の世界恐慌をむかへて一層深刻さを増したのでありますが，政府はこれらの原因を物価高にあるとして財政緊縮・財界整理等の方針をとつたので国内景気は沈滞し，同時に国内購買力の低下になやまされ，産業界も倒産，合併，買収が相ついで起つたのであります。この期間における生産額（前号第４表の生産額を日銀卸売物価指数でデフレートしたもの）の推移をみると第６表のとおりであります。

第６表　年次別生産額

年　次	生産額
	百万円
昭和１年	5,995
〃　２年	6,138
〃　３年	6,515
〃　４年	7,199
〃　５年	6,708
〃　６年	6,898

この表からみてもわかりますように昭和４年まで漸増をつづけましたが，昭和４年の世界恐慌，同５年の金解禁を経て５年以降は停滞にむかつたのであります。これを県内についてみてみましよう。第７表は県内における生産額の推移をみたものでありますが，国の場合は昭和４年まで漸増を続けたのに対し，本県の場合その漸増も昭和３年でストツプし，昭和４年以降は減少に入つたのでありますが，その減少率は和昭６年から急激に増大して行くのであります。

第７表　県内生産額の推移

年　次	生産額
	円
昭和１年	56,042,928
〃　２年	56,509,551
〃　３年	62,272,641
〃　４年	55,702,182
〃　５年	36,217,231
〃　６年	31,498,415

また，従業者についてみると，第８表でみられるとおり，昭和３年まで漸増を続けていたものが昭和４年以降は昭和６年にいたるまで漸減を続けております。すなはち昭和２年より昭和３年にわたる金融恐縮という景気沈滞のなかで行なわれた大企業のカルテル活動を通じて生産制限や価格維持等を行なつた反面，これに対応して従業者数を減少させたが，当時アメリカ景気の好況による刺激によつて国内景気も若干好転し，ために中規模層を中心としていぜん従業者の増加が続いたため，総体としては漸増という結果になつたものとみられております。また昭和４年以降はその年の秋アメリカにおける証券市場の崩壊に端を発し俗にいう世界恐慌が起り，昭和５年にはそれが全世界を襲つたことは前号で述べたとおりであり，この年の初め慢性的不況からの脱却策として打ち出された金解禁（金本位制への復帰）は，実際上はわが国産業界の恐慌状態をより深刻化させることとなり，中小企業の倒産はもとより，大企業においても倒産，減資が相ついでおこつたのであります。したがつて事業所数，従業者数も大きな減少を示すにいたつたのであります。それでは県内の従業者の推移についてみてみましよう。

第８表　年次別従業者数

年　次	従業者数
	千人
昭和１年	2,062
〃　２年	2,083
〃　３年	2,133
〃　４年	2,056
〃　５年	1,875
〃　６年	1,842

第９表　県内年次別従業者数

年　次	従業者数
	人
昭和１年	20,608
〃　２年	17,998
〃　３年	17,975
〃　４年	14,926
〃　５年	13,649
〃　６年	13,233

第９表から本県では昭和１年以降連続して減少をし[illegible]り，国の昭和１年～昭和[illegible]年の漸増に比し，大きな減少率を続け零細企業の多い県内産業の不況下における経営のむづかしさをよく物語つております。したがつて，当時の社会現象のあらわれとして，本県労働争議ぎの第１頁が開かれたのが昭和４年でありましよう。つまり企業合理化の名目のもとに従業者解雇に反対して，日立鉱山の従業者 1,000人が大集会を開催し，演説会を行なつたのでありますが，その内容が過激であるとの理由で警官に解散を命ぜられ，遂に労働者と警官の間に衝突が起り，多数の検挙者を出したのであります。参考までに当時の日立市を含む多賀郡下の全従業者数は昭和[illegible]年11,530人，昭和３年8,564人，昭和５年2,897人と[illegible]間に５分の１に減少したのであります。この５年間に従業者の減少をみた郡は，稲敷郡，新治郡，（土浦市を含む），真壁郡の３郡でありますが，その減少率は多賀郡に比べますと漸減にすぎません。すなはち，稲敷郡は昭和元年に1,000人であつたのが昭和５年には867人で[illegible]人の減少，新治郡は2,275人が2,181人で94人の減少，真壁郡は1,309人が1,275人で34人の減少にすぎず，他郡はそれぞれ増勢にあつたのであります。このように恐慌の嵐は県内にも大きな影響を与へたのでありますが，とくに多賀郡，わけても日立市が集中的に被害を受けたことがわかるでしよう。すなはち，重工業部門間で大き

の被害を受けたことがわかりますが，産業別に減少の目立つたものを県内産業からひろつてみますと紡織工業が挙げられましよう。それでは県内の生産活動を地域別に概観してみましよう。

第10表　　地域別工場数，従業者数，生産額構成比の推移　　（単位%）

地域名	昭和1年			昭和3年			昭和5年		
	工場数	従業者数	生産額	工場数	従業者数	生産額	工場数	従業者数	生産額
総計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
県北	37.5	65.1	64.9	38.3	58.5	68.1	47.6	39.8	56.0
鹿行	9.8	1.9	1.4	8.4	1.9	1.5	7.4	3.4	3.2
県南	22.4	16.5	18.1	22.8	18.3	13.9	19.3	23.9	17.6
県西	30.3	16.5	15.6	30.5	21.3	16.5	25.7	32.9	23.2

第10表から昭和1年の県内総工場数に占める当該地域のそれぞれの地域別構成比をみてみますと，県北地域が37.5%，県南，県西両地域で52.7%と県内全工場数の2分の1を占め，鹿行地域は9.8%に過ぎず，現在の地域別構成と同じく低い位置におかれていることを示しております。しかしながら，従業者数，生産額についてみますと県北地域はそれぞれ65.1%，64.9%と全体の5分の3強を占めていることがわかります。このことからも県南，県西両地域の工場の規模が零細企業であることを明確に物語つております。

こうした地域別構成は昭和3年に至つても大きな変化はみられなかつたのであります。しかし，詳細にみてみますと県南，県西両地域における工場数の構成比は53.3%と前回と同位置にありますが，昭和1年にくらべますと0.6ポイントと比重が増加し，反対に生産額は3.3ポイントの減少を示しております。これは県北地域の3.2ポイントの増加と見合うものでありますが，このことから県北地域は工場数，従業者の集積よりも生産額のウエイトが大きく集中化が進められたとも考へられるのに対し県南，県西両地域は両者の集積にくらべますと生産額は小さく，小零細経営と軽工業のウエイトの大きいことを推察できるのであります。

当時の本県の全県に対する位置をみたのですが第11表でありますが，紙面の都合で掲載する府県は関東ブロック内にとどめてみましたので御了承願います。次にこの表から当時紡織工業の比重の高かつた長野・群馬・山梨等の各県が上位にランクされていることがわかります。

第11表

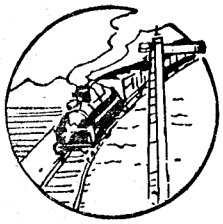
明治42年と昭和3年の工場数，従業者数の全国府県別の順位

	工場数順位		従業者数順位	
	明治42年	昭和3年	明治42年	昭和3年
	位	位	位	位
茨城	37	39	34	33
栃木	16	25	20	32
群馬	10	13	14	7
埼玉	7	10	7	11
千葉	18	24	31	37
東京	1	※2	※2	※2
神奈川	31	20	18	9
山梨	27	33	13	28
長野	13	9	5	5
静岡	11	6	8	8

備考：(1)　東京※印の1位はいずれも大阪府
　　(2)　最下位は工場数明42，昭3とも宮崎県（沖縄を除く），従業者数はそれぞれ青森県。

このように当時の生産活動を概観してみみすと昭和2年の金融恐慌の激げしい嵐のなかで，県内の企業が息をひそめ，荒波を乗り越え生き抜くために必死に生産活動を守り続けたことでありましよう。

次号では続いて昭和3年～昭和5年の経過と，昭和初期の恐慌下の産業構造をさらに重工業部門と，軽工業部門とに分け観察してみましよう。



四　国　の　旅

——全国統計教育研究大会参加記——

田　中　文　司

南国高知において，12月１日，２日の両日開催された第17回全国統計教育研究大会出席のため，11月29日東京駅発20時急行寝台(安芸)乗車，同行は大録課長補佐，県教育庁指導課石川指導主事，県教育会統計教育研究部長川崎緑岡小学校長，同副部長赤塚土浦市立東小学校長，統計教育実験学校，北相馬郡守谷町立月岡守谷小学校長，当日参加の紅一点，大会分科会の研究発表者守谷小学校堀越教諭の７人であつた。

<大　会　場　寸　景>

寝台上[illegible]のゴト，ゴトを子守唄に聞きながら，いつしかうつらうつら京都にて目を覚まし神戸駅着６時18分，日本は狭いというけれど，神戸の朝は６時半過ぎてもまだ薄暗くカメラのシヤツターが言うことをきかない。本県とは約１時間位の差があるらしい。駅前にて朝食，水戸黄門様ゆかりの湊川神社に詣ず，〃嗚呼忠臣楠子の墓〃の墓碑が薄暗くて読めない状態であつた。

港町は，朝の港湾労務者で賑わう。露店の飯屋が並び朝早い港湾従業者はここで腹を満し，小さなポンポン船に満載され沖の貨物船に送られていく，港ならではの風景である。ここから関西汽船すもと丸にて，淡路島を右手に眺めながら約２時間，島第一の都市州本に着く，ここからバスで約50分四国に面する福良港に着く，地図の上ではちつぽけな淡路の島も１市２郡からなり面積約595km^2（久慈郡ぐらい）人口は185千人を有し，この目で眺める限りでは島という感じはない。福良港から小型の木造汽船にて渦潮の鳴門海峡に向う。鳴門の渦潮は，内海と外洋の水位約３ｍの落差によつて生じる大，小さ[illegible]ざまの渦が，轟々と大音響を発し，小型汽船を呑み込む[illegible]ようにゆさぶり壮観極まりない。約１時間にして四国[illegible]関門鳴門市に着き，駅前食堂で小休止，ここから最終目的地高知市へと，徳島本線，土讃本線を経て列車は進む。四国にきて驚くことは山地の多いことである。香川県を除き，徳島県は総面積4,143平方キロメートルのうち山地の占める割合は83％もあり，そのうち標高1,500メートル以上の山岳が25以上もあるという。また高知県は総面積7,104平方キロメートルあり本県の1.2倍もあるが，そのうち山地は89％を占め，山地の占める割合では全国１位にあたり1,000メートルの以上の標高を有する山岳が100以上もあるという。また，愛媛県は総面積5,[illegible]平方キロメートルで山地の占める割合は84％に及んでいるから，四国は山の国ということになりそうである。だからこの国鉄本線は，山また山の谷間をぬつて進み，トンネルが非常に多く100以上もあるという。この沿線には有名な大歩危（おおぼけ），小歩危の景勝を右に左に眺めることが出来る。

陽汽は，本県と余り変らないように感じられるが，やはり南国ということは紅葉がちようど見頃ということでも表現されている，こちらよりは約１カ月ぐらい遅れているらしい。途中の農家の庭先にミカンが色づいている。日暮れは水戸より30分位は遅いようである。やがて18時，最終目的地高知駅につく。駅前が何んとなく[illegible]く寂しい。

この大会のため当地関係者のお骨折で割当られた[illegible]前桂館に旅装を解き，四国料理に旅の疲れをほぐす。

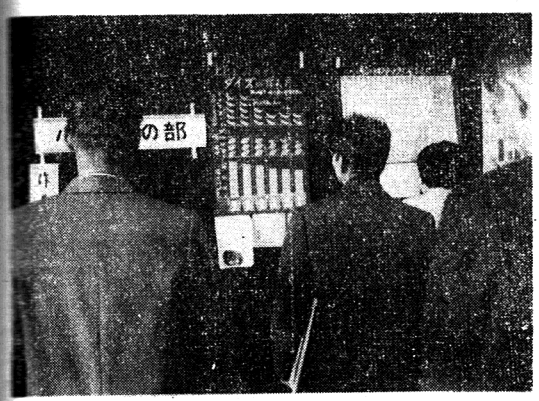
ここまでの粁程は1,065粁（約270里）１日半の[illegible]る。現在新東海道線などの開発でスピード化は進んでいるが，やはり遠いなあという感じは深い。宿の女中さんから有名なヨサコイ節のはりまや橋の所在を尋ね，[illegible]は一見に如かずとブラリ夜の高知の街を見物する。はりまや橋はやはり時勢の波におされていまはただ[illegible]ランカンを残すのみで川は埋められ橋という感じはない。ヨサコイ節の主人公は，市内にある五台山竹林寺の絶信という坊さんと鋳かけ屋の娘お夏の恋物語りで，はりまや橋畔の小間物屋でかんざしを買つて送つたこと[illegible]

[illegible]にまでなり，二人はそれを苦にしてかけ落したという[illegible]物語であるそうな。この附近の土産物屋で目につくことは土佐の荒海から採れる珊瑚を加工した，さんご[illegible]非常に多いことである。高知市は人口218千人，高知県人口813千人の約4分の1を占め人口密度は1,652人である。

第12回全国統計教育研究大会は，12月1日，2日の両日，高知市の県民ホールで開催された。この大会は，社会の進歩発展に伴なう科学的，合理的な国民の育成を目的として全国各地において実践，研究を続けている統計教育の成果を発表するとともに統計教育に課せられた諸問題について討義，検討がなされ統計教育振興のために毎年行なわれているものである。

会場の県民ホールには，高知市の中心県庁の近くにあり，高知城を望みビンロー樹，ソテツなどの街路樹が南国情緒をかもし出している。

この大会の参加者は，全国の統計教育関係者約800人会場には，さきに行なわれた全国統計図表コンクールの入選作品が展示されており，本県の里川君の作品〃土によつて違う大豆の育ち方〃が特選賞，行政管理庁長官賞に輝いていた。そのほかに本県関係では小学校入選作品



＜本県黒川君の図表を見る参加者＞

2点，中学校一点が展示され参加者に感銘を与える。9時30分開会，有沢広巳会長のあいさつ，高知県知事，高知市長のあいさつにつづき，文部大臣，行政管理庁長官の祝辞があつて，統計教育に功労のあつた36名に対し全国統計教育振興協議会長有沢広巳氏から受賞。本県では前統計教育研究部長倉持清治氏が表彰された。全体発表会では，1.効果的な校内外の研修体制について神奈川県大船小学校長，2.教育課程における統計教材の系統愛知県名古屋小学校教諭，3.教育評価における統計の活用高知県大正中学校長がそれぞれ発表，つづいて各分科会においてパネルデイスカシヨン，発表が行なわれる。分科会は算数，社会，理科，家庭体育，道徳，特活，数学以上小学校，中学校では数学，社会，理科，技術家庭，保健体育，道徳特活，高校が数学，商業，その他振興研究の13分場，この中で特に異彩を放つたのは本県の守谷小学校堀越教諭が女性として唯一人，小学校の部理科において2カ年の実験学校としての実践研究に基づく，理科学習の効果を高めるために統計的な手法をどのようにとり入れたよいかと題し立派な発表を行ない参加者に深い感銘を与えた模様であつた。

2日目は，分科会結果の報告，広島大学教授中野昇氏の講評，スライド〃学校でのけが〃　〃中学生と近視〃上映，有沢東大名誉教授の講演をもつて意義深い大会を終了，統計教育前進のため決意を新にした次第である。以上，大会に参加して感じたことは全国からの参加者が統計教育について関心が深く常に研さん努力をしていることであり，本県の場合は，この仕事を担当されている教育庁指導課の統計教育に対する考え方を再認識して後退することなく，42年度こそ前進してもらいたいことである。

土佐の国は，名勝景跡が多く，室戸岬や足摺岬を中心とした南国の豪壮な海洋はとくに見どころであるらしいが，決められた公用の旅では日程が足りず後日にゆずることにして，周辺の月の名所の桂浜，鐘乳洞の竜河洞を馳足けで尋ねる。

帰路は，土讃本線に高松から，宇高連絡船を経て，山陽，東海道本線，来る時は暗につつまれた四国の山脈がうつすらと雪化粧をしているのには驚く，南の国に雪が降るの実感を味わつたのは，途中一天灰色に塗りつぶされ雪が激しく降つて大地を白一色に染め始める。この光景は讃岐平野に列車が躍り出すまで続く，讃岐平野は晴天，いままでの雪の乱舞が嘘のように思われる。めつたに来られないとあつて琴平下車，有名な金比羅様を拝んでいく，1,368の石段は旅の疲れで相当に応える。高松にて壇ノ浦の古戦場屋島にて往時を忍び，名園栗林公園を巡り，高松一泊，翌早朝宇高連絡船にて瀬戸内海の島々の間をぬつて宇野着，ここから一路帰路の列車にゆられ遠い四国の旅にさよならを告げた。

統計スナップ

秋の叙勲

中山卯一郎氏に輝く!!

勲六等単光旭日章

政府はさる41年11月3日文化の日に「秋の叙勲」を発令した。国勢調査，各種統計調査に永年尽力された統計調査員10氏が叙勲され，本県関係では，中山卯一郎氏(73)—猿島郡岩井町辺田311—が選ばれた。大正9年の第1回から昨年の第10回国勢調査まで過去45年間の地道な統計業績が政府によつて認められたものである。

中山卯一郎氏は40年3月にも藍綬褒賞を受章しており2年連続して晴れの栄誉に浴したものである。

この伝達式は11月15日総理府において，森総務長官により行なわれたのち，皇居において，陛下に拝賜を賜わつた。永年，統計調査員として統計の発展に貢献された功労がここに報いられたもので，氏に対し心からお祝い申し上げると同時に，県下の統計関係者と喜び共にするものである。

家計調査員からみた交際費

年末年始は1年中でもとくに交際費がかさみますが，皆様に記入していただいた家計調査の結果によつて最近の交際費の動きを調べてみましよう。家計調査では，家計の支出の中味を食料費，住居費，被服費，光熱費，雑費に大きく分け，さらにその中を細かく分類していますが，このうち，近所，親戚，友人，職場などでのつきあいのため支出された金品をまとめて交際費として集計しています。

まず交際費の最近の動きをみますと，家計費の総額は昭和30年から40年までの10年間に金額で約2倍にふえていますが，交際費は約3倍になつています。そのため交際費の家計費に占める割合も年々大きくなつています。

これを40年についてみますと，1世帯あたりの月平均の交際費は3,194円で，家計費の総額51,832円の約[illegible]を占めています。

交際費の年間の動きをみますと，お歳暮，お中元の時期は交際費がかかるわけですが，12月がやはり最も大きく，ついで1月，3月，8月の順になつており，9月が最も小さくて12月の3分の1となつています。

このような交際費の内訳をみますと，年平均では祝儀せん別，香典，見舞金などの現金が最も大きく交際費の約2分の1を占めています。ついで菓子，果物，酒類，砂糖などの調味料，かん詰類，衣料品，人形，書籍などの贈答および接待，交際のための飲食費が主要な支出となつています。

なお，年末の12月に支出の大きい項目をみますと現金贈答のほか，衣料品，酒類，砂糖などの調味料の購入がとくに多く，また，塩ざけ，干のりなどの項目もふえ[illegible]の月に対して支出がふえています。

収入の大小と交際費の関係をみますと，収入の多い世帯は少ない世帯に比べて交際費の金額が大きく，家計費に占める割合でみても大きくなつています。また，品目別の支出の割合は収入の多寡によつてそれほど違いはありませんが，収入の高い世帯では食料品への支出割合がやや小さくなつています。

都市の大小による特徴をみますと，交際費は大都市で最も大きく中都市，小都市，町村の順で小さくなつていますが，家計費全体に占める割合でみますと順序は逆となり町村が大きくなつています。

古河市で第1回統計大会開く

第1回古河市統計大会はさる11月4日古河市公民館で統計功労者等約80名参集して開かれた。

市から須藤市長をはじめ，青木助役（統計協会長）また，来賓として，逆井市議会議長，柿沼市議会副議長，県から大録統計課長補佐が出席した。

須藤市長のあいさつ統計協会長あいさつののち，統計功労者53名が，県統計協会総裁，古河市長および市統計協会長からそれぞれ表彰の栄を受けた。

表彰について，県統計協会総裁，市議会議長の祝辞，受賞者代表謝辞があり，第1回古河市統計大会の開催を記念して，大録県統計課長補佐の「茨城の再発見」と題する講演を最後に記念すべき第1回の統計大会を終了した。

忘れもの雑記

—77％はかえらない—

年末年始の頃ともなると忙しいので忘れものが多くなる。忘れるということは誰れにもあるが，若し忘れることがなかつたら，いろいろな現象が起ることでしょう。

よく列車の中に大事な位碑をなくしたり，タクシーの中に何百万円もの現金を落したりのニュースを耳にする。さて県内にはどの位，どんなものが忘れられるんだろうと一寸興味があつたので，県警察本部会計課を訪ねて遺失物の状況をきいてみた。

拾得物の処理については，各警察署で行つているが，会計課は県内の遺失物，拾得物などの届出について県内警察署から報告をとついる。

下の表をご覧になればすぐ分りますが，昭和40年度をもとつてみると，遺失届は2万3,527件もあり，その内は通貨で4,704万円，物品は3万5,171件と意外な大きな数である。この遺失届に対して拾得届はどのくらいあるかとみると4万1,182件，遺失届が少なくて拾つた方が大きいのは遺失しても届けないものとみられる。忘れたり落したりしたらどんなものでも届けた方がかえる率が大きいというものです。

同じ遺失物でも家畜類や生鮮魚介類は倉庫に入れておくわけにはいかないので換価処分されます。それは557件，900点，34万1千円にもなります。

遺失物や拾得物はどのように処理されたか第2表をごらん下さい。昭和40年度でみると，なくした本人に還されたのが5,262件，通貨で1,764万円，物で1万561点，拾つて届けたので法により拾つた人に交付された数は，1万3,285件，その金額は9,730万円，物で1万6,676点もあり正直者は得をしているわけである。

第1表と第2表をよくごらんになると分りますが，現代社会の縮図か或は道徳の低下か分りませんが，はつきりこの表に現われております。それは第1表遺失届2万3,527件に対して遺失者本人に還されたのは5,363件，金額（通貨）では4,704万円に対して1,764万円程度が返還されている。返還率は件数で33.4％，通貨で37.5％，これで推測できるが拾つても届けず77.6％の件数は猫ばばされてしまう。通貨で62.5％，2,940万もある。

このように落しても出ないという意識があるので，第1表のように拾得届4万1,182件に対して遺失届は2万3,527件しかないのはその裏付けであろう。

そこでどんな品物が遺失されているか拾得物と比例するとみられるが，何んといつても一番多いのがハンドバック，万年筆，ハンカチ等の携帯用品，次に衣類，3番は洋傘など雨具類，数は少なくなるがカメラ，時計，ラジオ，テレビ，有価証券などある。もつと書きたいが紙面の都合でこの辺で筆をおきますが，わたしたちも忘れものしないよう注意し，また落しても拾つても届け出て明るい社会にしたいものである。（Y・M）

第1表　遺失届と拾得届

区分 / 年別	遺失届			拾得届		
	件数	通貨	物品点数	件数	通貨	物品点数
		円			円	
昭和38年度	25,556	37,337,143	33,784	40,266	23,023,782	53,437
昭和39年度	24,107	40,079,047	33,715	42,145	27,217,555	51,514
昭和40年度	23.527	47,043,491	35,171	41,182	29,978,321	53,775

第2表　遺失物帰属調

区分 / 年別	遺失者等に還付			拾得者に交付		
	件数	通貨	物品点数	件数	通貨	物品点数
		円			円	
昭和38年度	6,713	12,076,707	12,469	10,865	7,754,623	18,194
昭和39年度	5,288	15,044,087	9,322	11,504	8,433,374	19,063
昭和40年度	5,262	17,649,631	10,561	13,285	9,730,487	16,576

第3表　拾得品の品目調

物品名	昭和38年度	昭和39年度	昭和40年度
携帯用品	9,691	9,742	9,021
コウモリ・傘	7,279	5,313	8,269
軽装身具	5,155	4,735	5,131
衣類	9,295	8,986	9,000
カメラ	266	218	238
時計	1,845	1,962	2,208
有価証券	114	18	171
その他	19,792	20,540	19,737
総計	53,437	51,514	53,775